

よい先生とは

いまほど子供たちにとって、本ものの先生が渴^かくがごとく求められている時代はない。それにつけても、十数年前に読んだ重症心身障^がい児の石垣原養護学校の若き女教師橋本好美さんの手記が思い出されてくる。

新任の橋本先生が教壇に立つてもガヤガヤは収まらず、プラモデルをいじくっている子らもいる。彼女は意を決して、まずそれを片づけてやろうと手をのばす。すると、先生の手を払いのけ、その子は叫んだ。「バカにしちよる」と。外の子らもおし黙ってはいるが、目は同じようなことをいつている。彼女はカッときた。こんなに親切にしているのと思うと、ガマンできずどなってしまう。

―「あんたたちこそなんかい。ひとにものを頼んでも、お礼のいうみちもしらんで」。これまで腹にたまっていたものを、いいも悪いもない。はらたちまぎれに全部はき出してしまった。もうその時は教師対子供ではなかった。しばらくして、政広君がいった。「ぼくたちだって、自分でできることがあるんで」。

「ああ：どうしよう」。私は子供たちのいおうとしていたことがやっと分かった。私はなんといいことをしたんだろう。がまんができません、大声をあげて泣いてしまった。どのぐらい泣いていただろう。ふと気がつくと、子供たちも泣いている。「ごめんね」。

手記は続くのだが、彼女が自分の弱点を子らの前にさらけだし、子にわびる。ここですべて子らの心と結びあえる。子らのせいっぱい生きんとする姿にも、やっと気がつくことができる。手記の結びがすごくよい。「この子たちを本当に大切にすることがどういふことか、まだ分からない」。その限らない自己反省が教育の神髄である。彼女に教えられた幾百の子らは幸せだ。

(一九八六年一月二十日)